

終戦で一変略奪の的

中島 俊明さん(79) 常総市

戦後70年へ 遺言

私は昭和20(1945)年8月15日の終戦の日には、旧満州国(中国東北部)の延吉で国民学校(小学校)4年生

の夏休みを過ごしていた。

正午、ラジオの玉音放送が終わるとすぐ、日本人専用のマーケットめがけて数千人の中国人、朝鮮人の群衆が略奪

にきた。暴徒と化し、異様な声を発しながら突進してきた。初めは少数の日本兵が追いついてしたが、次第に群衆の力に押されて身の危険を感じたためか、軍刀で斬りかかった。血を流しながら逃げ惑う人々。「五族協和」を掲げた満州国だったが、民族の団結も友愛もない。貧困にうちひしがれてきた人間の赤裸々な姿と本性が見られるだけだった。

自宅はマーケットの近くにあり、惨状を見かねて、父が日本兵に「戦争は終わったのだ」と説得しようとした。いきり立った日本兵は父を国賊

とののしった。その場に居合わせた母が父を自宅の押し入れにかくまった。

大方の品物を奪い、略奪の動きは止まりかけた。しかし、暴徒が今度は民間人の家に容赦なく踏み込んできた。後難を恐れ、家族で約4⁺離れた陸軍病院に逃げ、敷地内で野宿した。

ソ連は8月9日、日ソ中立条約を破棄し、ソ満国境を越え、侵攻してきた。16日未明、病院はソ連軍の戦車、装甲車、自動小銃で武装した兵士によって包囲されていた。

日本人は居場所を失い、延吉市街に移動することになった。男はすべてシベリアに連行されると聞かされた。家族の離別の時が迫り、母は、小

「五族協和」粉みじん

旧満州国での苦難

戦中手記を募集します

朝日新聞水戸総局では戦争を体験した方々の手記を募ります。

原稿用紙(400字詰め)3枚以内(ワープロ打ちの場合はA4用紙で1200字以内)にまとめ、お送りください。紙面でご紹介する際、趣旨を変えない範囲で省略したり、要約したりする場合があります。写真や日記、遺品などの資料類についても情報をお寄せください。

あて先は〒310-0062 水戸市大町1の2の38 朝日新聞水戸総局「戦後70年手記」係(電話029-226-0131)へ。住所、氏名、生年月日、連絡先の電話番号を明記してください。なお手記はお返しできません。

学6年生の兄、私、2年生の妹、5歳の弟を連れ、隊列に遅れまいと必死に歩いた。しばらく歩いた時、後方で大きな声がした。行ってみると、突然、女の人が私の頭に手を置いた。振り返って、よく見ると父だった。近くにいた知人の幼児を背負い、ほっかぶりをして逃げてきたのだ。

その後、家族は民家に分宿させられ、ソ連軍の略奪、発疹チフスに悩まされる日が続いた。発病して動けない両親に代わり、大福売りを始めた。1個1円60銭で仕入れ、2円で50個売る。シベリアに送られる日本兵に延吉駅で売り続けた。品物を盗まれたり、売上金を奪われたり。何度泣いたことか。ジャガイモの粉で作ったギョーザのようなものやアメモ売った。遺体から脱がせた軍服をブローカーに売り、その金でアメを買ってくれた日本兵もいた。これが少年が経験した真実だった。